

# 火山噴火予知連絡会第5回活火山ワーキンググループ議事録

日時：平成14年2月1日(金)10時00分～12時00分

場所：気象庁予報部会議室

出席者：委員：宇井、井田、岡田、吉田(秀)(代理：文科省)、陶、竹内

オブザーバー：山根(海上保安庁)、高木(気象研)、千葉(アジア航測)

事務局：小宮、西出、中禮、山里、林

## 1. 第4回WG議事録について

- ・議事録について承認。

## 2. 活火山の選定について

地質専門家で構成する検討会での作業の結果を報告。活火山の定義は、「過去おおよそ2,000年以内に噴火した火山及び現在噴気活が活発な火山」から「おおよそ過去1万年以内に噴火した火山、及び現在噴気活動が認められる火山」に変更する。個々の火山について、原著論文の記述を調べ、一部は現役の研究者へのヒアリング、地形図・航空写真などを利用して、新定義に従って、判定作業を実施した。検討結果の概要は次のとおり。

- ・86の活火山に加えて、60余りの火山を検討対象とした。
- ・海底火山については、水深500m以下の火山のみを対象とした。
- ・判定に用いた年代値は、放射性炭素測定年代等を用いており、歴年代との多少の差はある。
- ・活火山であるかどうかを判定するには今後の調査が必要な火山が、約20あった。
- ・カルデラ形成噴火は新定義で対象とした1万年より間隔が長い。このため、カルデラ火山とポストカルデラ活火山が活火山となっているかどうかを表にまとめた。
- ・火山現象とよく似た水蒸気爆発が起きる可能性がある地熱・温泉地帯については、整理しておいたほうがよいという議論があった。
- ・単成火山群の英名について、“Volcano Group”は適切ではなく、“Volcanoes”に統一するべきである。
- ・近接して1万年定義の活火山がある場合は、火山学ではなく防災上の観点から分離するか一つにまとめるかを判定するべきである。また、火山の名称は地元で使われている地名によるべきである。

また、いくつかの火山を例に、検討作業の概要を説明した。(宇井委員)

### ＜議論＞

- ・現在赤城山が活火山になっている根拠は、「吾妻鏡」の記述であるが、これに対応する噴火活動の有無が学界で論争になっており、今後の調査研究が必要である。あえて活火山のリストから外す必要はない。
- ・単成火山群の英名を“Volcanoes”に統一することは適切である。伊豆東部火山群の英名も含めて、変えるとよい。
- ・従来の活火山に近接して1万年定義の活火山がある例では、今後、地元との連絡調整をする必要がある。
- ・本日の火山噴火予知連絡会に、今日の資料のうちどれを報告するかは幹事会に委ねる。

## 3. 今後の予定

今後、次の作業を進める。

- ・国の機関、地方自治体に、活火山の選定方針の説明。
- ・広く意見を収集するため、学術的には地球惑星科学関連学会合同大会で発表する等し、また地元のご意見を伺う。
- ・活動度に応じたランク分けの作業を平成14年度に行い、平成15年2月にランクをつけたリストを正式に決定して発表する。
- ・来年度は、地質専門家で構成する検討会を4回ほど行い、ランク付けの作業の方針、放射性炭素測定年代の暦年への補正、水蒸気爆発の可能性がある地熱・温泉地帯のリストアップ、活火山総覧の改版の編集方針と部分的試作、収集した資料の管理方法、平成15年2月の公表時の資料準備の検討を予定している。